

# 日本語と中国語の数量表現について

趙 小鳳

## 一、問題の所在

現代日本語と中国語において、助数詞（中国語では「量詞」）は使用頻度が高い上、構文上で重要な成分の一つである。しかし、具体的な表現において、両言語では必ずしも同じではないと思う。

- (1) 彼は一時間バスケットボールをした。（\*他一个小时打了篮球。）
- (2) 私は一枚の映画チケットを買った。（\*我买了一张的电影票。）
- (3) 彼はリンゴを食べた。（\*他吃了苹果。）

この三例はそのまま中国語に訳すと、非文になってしまう。なぜこのような違いが生じるのだろうか。中国語と日本語との数量表現を比較しながら、その違いを明らかにしたい。

## 二、数量詞の定義と分類

### 1. 数量詞の定義

中国語の数量詞は「数詞」と「量詞」からなる。「数詞には基数と序数の別があり、基数は数量を表すが、序数は順序を表すもの」（丁樹声 1979）である。量詞の定義については、「量詞は通常、指示代名詞や数詞の後と名詞の前に位置する。」（丁樹声 1979）というものあれば、「人や物の単位、或いは行為の単位を表す言葉」（張志公 1979）というものもある。本稿は「量詞は計量の単位を表すものである。」（張斌 2009）という概括的定義に従う。

日本語にも中国語の数量詞に相当するものがあり、数量を表す語に助数詞をつけるものがそれである。

### 2. 量詞の分類

中国語の量詞については様々な分類が行なわれている。例えば、呂叔湘(1980)では、量詞を「個体量詞、集合量詞、部分量詞、容器量詞、臨時量詞、度量量詞、自主量詞、動量詞、複合量詞」の九種類に分類している。また、郭銳(2002)では、「名量詞、動量詞、時量詞、自主量詞」の四種類に、張斌(2009)では、「物量詞、動量詞、時量詞」の三種類にそれぞれ分類している。本稿は張斌(2009)の三分法の分類に従うことにする。三分法の用語については、「物量詞」とは、名詞量詞とも言われ、名詞の前に付き、人や物の単位を表すもので、「動量詞」とは、動詞の後に付き、動作の回数や頻度を表すもので、「時量詞」とは、動詞の後に付き、動作の時間的長さを表すものである。日本語には助数詞という中国語の量詞に相当するものがある。「助数詞は、数える役割を直接分担しながら、その使用にあたって、名詞についてある種の分類を施していくものであるため、「類別詞」classifier と称されることもある。」（玉村文郎 1986）。具体的に、「本」「枚」「頭」「匹」などがある。

### 3. 数量詞研究の現状

中国語の数量詞の研究は 1898 年に初めての文法書『馬氏文通』が出版されてから、現在

まで続けてきた。例えば、楊樹達(1955)、丁樹声(1979)、張志公(1979)、朱德熙(1982)、張静(1982)などがある。20世紀90年代以降、認知言語学による数量詞の研究(石毓智 2001、2003、宋建勇 2006、範偉 2001)、また中国語と英語との数量詞の対照研究(楊壮春・龔志維 1999、隋曉輝・王燕 2007)、その他中国語教育における数量詞の研究(戴夢霞 1999、伏学鳳 2005)などが多く見られる。しかし、本稿の検討する内容については触れていない。

一方、日本語でも数量表現に対する研究が盛んである。日本語の数量詞の研究には、奥津敬一郎(1969)、玉村文郎(1986)、田野村忠温(1990)、阪東正子(1995)、加藤重広(1997)などがあり、また日中数量表現の対照研究には、奥津敬一郎(1986)、中川正之・李浚哲(1997)、安井二美子(1998)などが見られる。しかし、本稿で検討しようとする内容については、奥津(1986)、中川正之・李浚哲(1997)では少し触れているが、他の研究では触れていない。

### 三、分析

#### 1. 時間数量表現の位置における違い

##### 1.1 中国語の場合

冒頭に挙げた例文(1)の「彼は一時間バスケットボールをした。」を「\*他一个小时打了篮球。」のように訳すと、中国語としては成立しない。それを正確な表現にするには、「他打了一个小时篮球。」にしなければならない。「\*他一个小时打了篮球。」はなぜ言わないのか。両者を比較すれば、その原因が明らかになる。例文(1)の中国語訳文の問題は数量詞「一个小时」(一時間)の文中における位置の違いによるものと分かる。「一个小时」は「篮球」(バスケットボール)のすぐ前に置かなければならないのである。つまり、数量詞「一个小时」を動詞の後、目的語の前に移動させ、「他一个小时打了一个小时篮球。」にすれば、文が成立するようになるのである。これをパターン化すれば次のようになる。

#### (4) 主語＋動詞＋時間数量詞＋目的語

例：他 打了 一个小时 篮球

このパターンが示すように、中国語では時間を表す数量詞は必ず動詞の後に来る。動詞の前に来てしまうと、非文になるのである。

ここで問題になるのはこの「一个小时」という時間数量詞の文中における成分にどういう文法的説明を与えるかである。現在、これを「時量補語」とするのとらえ方と、「時量賓語」(時間目的語)とするのとらえ方がある。まず、補語というのは中国語では動詞の後に置いて、動詞が表現しきれない意味を補う働きをするものであるとされている。現に多くの中国語文法書もこの時間数量詞を「時量補語」として扱っている。もう一つのとらえ方は趙元任(1979)と馬慶株(1981)の「時量賓語」である。このとらえ方は「一个小时」のような時間数量詞を目的語として扱うことである。中国語は「SV0」言語であるため、構文から見れば、動詞の後に位置するものは目的語になるという基本的発想から、「一个小时」を目的語として扱う方がより合理的ではないかという考えである。本稿は後者と同じ考えをとることにする。

従って、「他打了一个小时篮球。」にある「一个小时」を「時量賓語」と呼ぶならば、「篮球」を「名詞賓語」(名詞目的語)と呼ぶことによって、構文がより明確になるのではな

いかと思われる。この考えをパターン化すれば、

(5) 主語＋動詞＋時量賓語＋名詞賓語

例：他 打了一个小时 篮球。

ようになる。故に、中国語の「打」(打つ)、「吃」(食べる)、「买」(買う)などの他動詞は「時量賓語」と「名詞賓語」の二つの目的語を取ることができると考える。ただそこには語順の制限があり、「数量賓語」は先で、「名詞賓語」は後という優先順位を守らなければならない。

以上の分析から、中国語の時間数量表現は文中における位置が動詞の後と名詞目的語の前に固定化され、他の位置への移動が制限されていることが言える。

1.2 日本語の場合

日本語の数量表現にも中国語の「時量」に相当するものがあり、それは「一時間」「一週間」「一年間」などであるが、文中における位置は中国語と同じかどうかを見てみよう。

(6) a. 太郎は一時間中国語を勉強した。

b. 太郎は中国語を一時間勉強した。

(7) a. 花子は三年間中国に滞在したことがある。

b. 三年間、花子は中国に滞在したことがある。

のように、日本語の数量表現は文中での位置が動詞の前なら自由である。動詞のすぐ前か、目的語の前か、又は主語の前に来るが、意味が微妙に違うものの、特に制限がないことは上記の例文で分かる。これはいわゆる数量詞の遊離現象であるが、ただ一言えるのは動詞の後に来ないことである。数量詞の遊離現象は奥津(1969)以来、数多くの論文が見られる。奥津(1969)では、この数量詞遊離現象を「構造上の転形関係」と呼んで、生成文法の立場からその文法的機能を記述した。それ以来、例えば坪本篤朗(1980)などでは、「数量詞の遊離」という用語を使って研究してきた。奥津(1986)では、「三匹の子豚がいました」(「三匹の子豚」型)、「子豚が三匹いました」(「子豚が三匹」型)と「子豚三匹がいました」(「子豚三匹」型)といった三つの数量詞移動のパターンをまとめたことで、その後の研究に大きく影響を与えた。

一方、中国語では、数量詞はその後に「名詞賓語」があってもなくても、動詞の後に置くのが前提である。いわば、中国語の数量詞は日本語より位置的固定性が強い。(6)(7)の各文を中国語に訳すと、

(6') a. 太郎学了一个小时汉语。

b. 太郎学了一个小时汉语。

(7') a. 花子在中国住过三年。

b. 花子在中国住过三年。

のように、(6') a、b と (7') a、b は、それぞれ同じ表現になるのである。これは時間を表す数量詞が位置的に固定化され、日本語のように自由に移動することができないからである。

以上のように、日本語の時間数量表現は文中においてその位置が固定化されず、動詞より前であれば、表現の意図に応じ、自由に他の位置への移動が可能である。

## 2. 数量表現の名詞修飾における違い

### 2.1 中国語の場合

例文(2)の「私は一枚の映画チケットを買った。」をそのまま中国語に訳すと「\*我买了一张的电影票。」のように非文になる。それを正確に表現するには、助詞「的」を外す必要がある。つまり、「我买了一张电影票。」にしなければならない。「一张」(一枚)の「张」は張斌(2009)の「量詞分類」によれば、「物量詞」の下位分類「個体量詞」中の一つである。

「個体量詞」は可算名詞で、物の個体を表すものである。例えば、「张」(枚)、「匹」(匹、頭)、「件」(件、着)などである。本稿の考察では、これらの「個体量詞」は一般に名詞の前に置き、直接に名詞を修飾するもので、両成分の間に「的」が入らないことが分かった。

(8) 看着大熊猫吃得津津有味, 他又拿来一根胡萝卜, 半个苹果。(パンダが美味しそうに食べているのを見て、彼はまた一本のニンジンと半分のリンゴを持ってきた。)

(9) 我拿出一支水笔, 在小黑板上写下了一道题:  $1 + 1 = ?$  (私はボードマーカーを取り出して、その小さな黒板に  $1 + 1 = ?$  という問題を書いた。)

(10) 到了考试当天, 每人面前都多了一张白纸。(試験当日、皆の前にまた一枚の白い紙が増えた。)

(11) 7月2日, 王先生在路边发现一匹马。(7月2日、王さんは道端で一頭の馬を発見した。)

(8)~(11)文中の「根」(本)、「个」(個)、「道」(題)、「张」(枚)、「匹」(頭)はいわゆる「個体量詞」で、直接に名詞を修飾し、日本語の「連体詞」と同じような働きを持つものである。

(12) \*他又拿来一根的胡萝卜。

(13) \*在小黑板上写下了一道的题。

(14) \*每人面前都多了一张的白纸。

(15) \*王先生在路边发现一匹的马。

のように、数量詞と名詞の間に「的」を入れると、非文になってしまう。しかし、新聞や小説の中で「数量詞+的+名詞」の表現も見られる。例えば、

(16) 赛后河南队在球场上合影留念, 每个人都是一脸的汗水和一脸的笑容。(試合後、河南チームが球場で記念写真を撮った。メンバーたちは、顔に汗水が流れ、満面の笑みがこぼれていた。)

(17) 由于这次要在美国呆上4个多月, 他足足带了一箱子的玩具, 以打发时间。(今度アメリカに四カ月以上も滞在する予定なので、時間つぶしのため、彼は玩具をトランクいっぱいを持っていった。)

(18) 男友背了一书包的书去上课了。(ボーイフレンドが本のいっぱい入ったかばんを背負って、授業に行った。)

(16)~(18)の「一脸」「一箱子」「一书包」はそれぞれ後に来る名詞を修飾する際に、「的」を使用している。これはなぜだろうか。考えてみれば、「脸」(顔)、「箱子」(箱、トランク)、「书包」(学生用カバン)は本来、「量詞」ではなく、普通の名詞である。ここでは普通の名詞から借用して一時的に「量詞」として機能させる、いわゆる「借用量詞」となっている。

このような「借用量詞」による数量表現は具体的な数量を表さず、全体又は満杯の状態を表すのである。このような場合は「的」が入りやすくなるのである。

しかし、全体から見れば、中国語の数量表現は基本的に「数量詞+名詞」の形からなっていることが言える。

## 2.2 日本語の場合

上記において中国語の「個体量詞」と「借用量詞」について考察を行ったが、日本語にも「個体数量詞」という用語が使われている。北原博雄(1996)では、「一まとまりを構成する要素を1つ1つ個別的・離散的に計量」する数量詞を個体数量詞という。例えば、「個」「冊」「杯」「本」「匹」「通」などである。日本語の数量詞は基本的に名詞であり、名詞の前に来れば「の」が必要になる。

(19) おばあちゃんの家には二匹の犬がいます。

(20) おばあちゃんの家には犬が二匹います。

(21) 昨日は友達に二通の手紙を書いた。

(22) 昨日は友達に手紙を二通書いた。

という二通りの言い方ができる。例文(19)のように、「二匹」が名詞「犬」の前に来る場合は助詞「の」が必要になる。これによって「数量詞+の+名詞」というパターンになる。

(21)も同様である。同時に、数量詞の遊離現象によって、例文(20)(22)のように数量詞は動詞の直前に移動する場合もある。「名詞+が/を+数量詞+動詞」というパターンになる。

一方、奥津(1986)には、次の例文がある。

(23) a. その三匹のうなぎをください。

b. そのうなぎを三匹ください。

説明によれば、(23) aは三匹いるうなぎを「その」が指示しているのであるが、(23) bは三匹以上のうなぎがいて、その中の三匹と言っているのであるという。(23) aの「三匹」は「うなぎ」の属性を表す。つまり、日本語の「数量詞+の+名詞」というパターンには、物の属性を表す働きがあるということである。また、奥津(1986)では中国語との対照研究の中で、例文(24) a、(24) bのように中国語の「数量詞+的+名詞」の場合は、「数量詞+名詞」に比べ、属性を表す働きがあると論述している。

(24) a. 我买了100日元的邮票。(100円の切手を買った。)

b. 我买了100日元邮票。(切手を100円買った。)(奥津1986による)

その説明では、(24) aの「100日元」は「100円切手」という切手の種類を示す属性Q(注: Qは数量詞)であるが、(24) bは数量Qで、「切手を100円分買った」の意味であろう、とあるが、果たしてそうなのかどうか。本稿の調査では、(24) aと(24) bの中国語は同じ意味である。(24) aの場合は、額面がそれぞれ違うものを何枚か合わせて100円分を買ったという意味であり、一枚100円の切手(切手の属性)を買ったというなら、この文だけでは正確な表現にならないと思われる。正確な表現にするには、「一张(一枚)という数量を金額の前に置かなければならない。

(25) 我买了一张100日元的邮票。

のように、数量詞「一张」という限定があつてこそ、「100日元的邮票」が始めて属性の意

味を持つようになるのである。というわけで、中国語では「数量詞+的+名詞」の形が必ずしも属性を表すとは言えないと考える。

以上の分析から見れば、日本語の数量表現が名詞を修飾する場合は基本的に「数量詞+的+名詞」の形からなっていることが言えるのではないかな。

### 3. 数量表現の有無における違い

#### 3.1 中国語の場合

例文(3)の「彼はリンゴを食べた。」をそのまま中国語に訳すと、「\*他吃了苹果。」のように、不自然な文になる。この問題について、陸俊明(1988)では、「動詞+的+名詞」というパターンの場合、目的語の名詞は数量詞の修飾を受けなければならないという指摘にとどまっている。本稿は、中国語では、一つまとまった文には「光桿名詞」(裸名詞)が入りにくいという性質を持っていると考える。その名詞が可算であれば、何かの数量表現が伴ってくる。単数なら、「一个」(一つ、一人)、「一张」(一枚)、「一杯」(一杯)のような数量詞を加えて表現するという規則性がある。

(26) 我知道你是个好孩子，也是个勇敢的孩子，要坚强，要有信心。(あなたは勇敢な良い子で、自信を持って頑張りなさい。)

(27) “你是个好同志，好姑娘，我很喜欢你。”(あなたは優しい良い人で、あなたのことが好きです。)

しかし、(26)(27)文中の「我知道你是个好孩子」と「你是个好同志，好姑娘」をそれぞれ「我知道你是好孩子」「你是好同志，好姑娘」のように、「个」を削除すると、文の安定さが低下し、ニュアンスが変わったり、また不自然なものになることもある。

中川正之・李凌哲(1997)では、次のような記述がある。「英語には“sheep, carp, fish”など単複同形と言われる一群の名詞がある。それらは概ね群れをなすものであって、おそらく、英語の話し手は“sheep”と聞けば、一匹の羊ではなくして群れなす羊をイメージするのであろう。日本語の名詞は、それに対して、単数に理解される傾向が強い。」、また「中川(1975, 1982)は中国語の裸の名詞を英語の“sheep”のごときレベルにあるものと理解し、“一个”の多用を説明しようとしたものである。つまり、中国語では“一个”がなければ複数にとられる、それを避けるために“一个”が使用されると考えたのである」という。その意味から見ると、日本語は「単数志向」の傾向がある。しかし、中国語の場合は必ずしも「複数志向」であるとは言えない。というのは、本稿の調査で中国人も「羊」と聞けば、単数に理解される傾向が強いからである。本稿は、中国語は寧ろ数量に関して「単数志向」でも「複数志向」でもない。文中において、単数か複数を問わず、数量表現が入っていれば、文として落ち着くようになると考える。例えば、

(28) a. 你买什么了? (何を買いましたか。)

b. 我买了些书。(本を何冊買ったんです。)

(29) a. 你干什么去了? (何をしに行きましたか。)

b. 我去见了一个人/几个人。(ある友達/何人かの友達に会ってきた。)

例文(28)bのように、数量詞は別に単数の「一本」(一冊)でなくてもいい。「些」(いくら

か) という複数を表す数量詞を入れても成立する。また、中国語では「\*我见了人。」は成立しないが、(29)bのように、単数が複数があれば成立するのである。

そこから、中国語の文には一般に数量表現が必要で、単数でも複数でも数量表現があれば、成立しやすという特徴があることが言えるのではないか。

### 3.2 日本語の場合

日本語の場合は単数が複数かという区別をはっきりさせるには、単数でも数量詞を入れることもある。

(30) その廊下の外に、一本の石榴の木が生えていた。(一本の花)

(31) 地面にへたりこんだ一匹の犬の写真がある。

(30)(31)文中に数量詞「一本」「一匹」があるが、それがなければ、一本の木か、複数の木か、一匹の犬か、複数の犬か判断がはっきりつかない場合もある。しかし、前後の文脈で分かる場合は数量詞を使用しないことが多いのではないかと本稿は考える。具体例を見よう。

(32) 日本人というのは、外国語が不得手な民族のようだ。(『現代』p.955)(日本人是一个不擅长外语的民族。)(注1)

(33) 家の前に止まっている黒い車を見たたん、不吉な予感に襲われた。(『現代』p.958)(看到家门口停着一辆黑色的车，顿时产生了一种不祥的预感。)

(34) 彼女は複雑な子で、私たちなんかよりずっと難しいことを考えているみたいだ。(『現代』p.961)(她是一个思想很复杂的孩子，想的问题要远比我们深得多。)

例文(32)の「民族」、(33)の「車」、(34)の「子」はどちらも単数の意味で用いられるものと思われるが、いずれも数量詞が使われていない。しかし、それらの文を中国語に訳す際に、それぞれ単数としての数量詞を入れないと落ち着きの悪い文になる。従って、例文(3)の中国語訳文「\*他吃了苹果。」が成立しない理由はやはり数量表現が入っていないというところにあると考える。そのため、例文(3)の「彼はリンゴを食べた。」を正確に訳すには数量詞を入れる必要がある。「他吃了一个苹果。」(彼はリンゴを一つ食べた。)  
「他吃了一块苹果。」(彼はリンゴを一切れ食べた。)  
「他吃了一片苹果。」(彼はリンゴを一枚食べた。)  
「他吃了一口苹果。」(彼はリンゴを一口食べた。)のように、数量詞を入れることによって初めて安定した文になるのである。日本語の場合はその前後の文脈で数が判断できる時、或いは別にはっきり言う必要がない時、数を示さないという前提があるため、わざわざ「私是一个のリンゴを食べた。」と言う必要がないであろう。反対に中国語の単数の数量詞が入った文を日本語に訳す場合は、数量詞をそのまま訳すと、不自然な日本語になるため、それを訳さないケースが多い。

(35) 黒呢子帽下根本是一个还没有长大的小姑娘，胸脯瘪瘪的，头发黄黄的。(黒いラシャ帽の下はまだ成長しきっていないまるっきりの小娘で、胸はぺちゃんこ、髪は黄ばんでいた。)(挿隊の故事(原文)・遙かなる大地(訳文))(注2)

(36) 他说他马上想起在太行山时认识的一个小女孩。(その時突然太行山で知り合った少女のことを思い出した。)(挿隊の故事(原文)・遙かなる大地(訳文))

(37) 继母又告诉他们：昨天晚上三婶和淑英也睡在这里，她们屋后的天井里落了一个炮弹，

把墙打坏了一个角，所以她们马上搬了出来。（また継母のいうには、昨夜は三姉も淑英もここでねたが、彼女たちの部屋の裏庭に砲弾が落ちて築地壁の一角が崩れたので、早速に引越して来たのだそうだ。）（家（原文）・家（訳文））

のように、中国語の数量詞の部分は日本語に訳す際に殆ど外されるのである。

以上の分析で、日本語の場合は前後の文脈で数が判断できる時、或いははっきり言う必要がない場合、数量表現がなくても成立するという特徴を持っていると考える。

#### 四、おわりに

本稿は、日本語と中国語の時間数量表現の位置における違い、数量表現の名詞修飾における違い、数量表現の有無における違いといった三つの問題を中心に考察を行った。その結果は次の通りである。

1. 中国語の時間数量表現は文中における位置が動詞の後に固定化され、他の位置への移動が制限されている。一方、日本語の時間数量表現は文中においてその位置が固定化されず、表現の意図に応じ、動詞の前という前提を守れば、自由に他の位置への移動が可能である。
2. 中国語の数量表現の名詞修飾は基本的に直接修飾で、数量表現と名詞の間に「的」を必要としない。この点は日本語の「連体詞」と同じような働きをしている。一方、日本語の場合は数量表現も普通の名詞と同じように、名詞を修飾する際、助詞「の」が必要になる。
3. 中国語の文には一般に数量表現が必要で、単数でも複数でも数量表現があれば、文が成立しやすい。一方、日本語の場合は前後の文脈で数が判断できる時、或いははっきり言う必要がない場合、数量表現がなくても文が成立するという特徴を持っている。

#### 注

1. 例文の最後に『現代』と書くものは辞書『現代国語用例辞典』のことを指す。詳細は出典の部分参照されたい。
2. 例文(35)(36)(37)は『中日対訳コーパス（第一版）』によるものである。詳細は出典の部分参照されたい。

#### 参考文献

- 楊樹達(1955)『高等国文法』商務印書館  
 丁樹声(1979)『現代汉语语法讲话』商務印書館  
 張志公(1979)『汉语知识』商務印書館  
 趙元任(1979)『汉语口语语法』商務印書館  
 呂叔湘(1980)『現代汉语八百詞』商務印書館  
 馬慶株(1981)「时量宾语和动词的类」『中国语文』第2期  
 張靜(1982)『新編現代汉语』上海教育出版社  
 朱德熙(1982)『语法讲义』商務印書館  
 陸儉明(1988)「現代汉语中数量詞的作用」『语法研究和探索4』北京大学出版社  
 黃伯榮、廖序東(1991)『現代汉语』高等教育出版社  
 邢福義(1996)『汉语句法学』東北師範大学出版社



- 戴夢霞(1999)「對外漢語名量詞選用教學的一點探索」『漢語學習』第4期
- 楊壯春・龔志維(1999)「英漢數量詞組對比研究」『外語教學』第1期
- 範偉(2001)「現代漢語個體量詞語法特點的認知解釋」『南京師範大學文學院學報』第2期
- 石毓智(2001)「表物體形狀的量詞的認知基礎」『語言教學與研究』第1期
- 石毓智(2003)「漢語的“數”和“有定”範疇的關係」『語言研究』第2期
- 郭銳(2002)『現代漢語詞類研究』商務印書館
- 伏學鳳(2005)「漢語作為第二語言教學中的量詞研究」『語言文字應用』第2期
- 宋建勇(2006)「現代漢語物量詞和名詞搭配的認知解釋」『現代語文』第12期
- 隋曉輝・王燕(2007)「漢英表量詞匯對比研究」『現代漢語』第5期
- 張斌(2009)『新編現代漢語』復旦大學出版社
- 北原博雄(1996)「連體用法における個體數量詞と内容數量詞」『國語學』186
- 奥津敬一郎(1969)「數量的表現の文法」『日本語教育』14号
- 奥津敬一郎(1986)「日中対照數量表現」『日本語學』8月号
- 奥津敬一郎(1988)「助數詞と數量詞移動」月刊『言語』5月号
- 玉村文郎(1986)「數詞・助數詞をめぐって」『日本語學』8月号
- 田野村忠温(1990)「現代日本語の數詞と助數詞—形態の整理と実態調査—」『奈良大學紀要』18号
- 阪東正子(1995)「日本語の數量詞構文について」『名古屋大學人文科學研究』24号
- 加藤重広(1997)「日本語の連體數量詞と遊離數量詞の分析」『富山大學人文学部紀要』26号
- 中川正之・李浚哲(1997)「日中兩國語における數量表現」『日本語と中國語の対照研究論文集』くろしお出版
- 安井二美子(1998)「日中助數詞の認知意味論的研究」『語學教育研究論叢』語學教育研究所15号
- 坪本篤朗(1980)「數量詞の遊離：その機能的側面」『東海大學紀要・文学部』34号  
出典
- ・辞書：『現代国語用例辞典』（1992、林史典・靄岡昭夫編、教育社）の中国語翻訳版『現代日語用例词典』（編集者、孫敦夫ら翻訳）
  - ・データ：『中日対訳コーパス（第一版）』（2003、研究代表者：徐一平）北京日本学研究中心ター
  - ・青空文庫：『一本の花』（宮本百合子）

(東海大學外國語教育センター特任講師)